

庚申堂のたぬき



庚申堂のたぬき

むかし、むかしのお話です。

今の笠原に庚申堂という小さなお堂が建っていました。その辺り一面は、春は桜がうす桃色の花をつけ、秋は木々が紅葉して、それは美しいところでした。村人たちはもちろんのこと、近在の者たちも庚申堂へお参りに来ては、辺りの景色に見とれながら、べんとうをつかっていったものでした。

その庚申堂の裏手の山に、ひどういたずら者のボン吉という子だぬきが住んでいました。

兄弟たちはみんなおとなしくて、おっかさんたぬきに、

「庚申堂には、えらいお坊様がおいでで、決していたずらしに山を下りて行ってはいかん。どんなにうまく化けていっても、お坊様には見破られてしまうから。」

そう言われると、みんなしんみように聞いたのに、ボン吉だけは聞けませんでした。それどころか、よけい庚申堂へ行ってみたくなりました。

ある、月の美しい夜、ボン吉はハギの枝をひと枝折って頭の上にチョイとのせ、おっかさんだぬきからおそわったおまじないをとなくて、かわいらしい娘にばけました。そして庚申堂へ出かけました。

庚申堂の辺りは、しつとりと夜露にぬれて虫の声だけが聞こえました。

「おっかさんは、お堂にはお坊様がおいでると言っただけだあれもないや。」

ボン吉はそう言うとお堂の縁へあがり背のびをして、木戸のふしあなからお堂の中をのぞいてみました。まっ暗でなんにも見えません。

「こんなまっくらやみの中に、ほんとにお坊様はおいでるやろか。」

ボン吉は、おっかさんたぬきから聞いた、なんでも見破ってしまわっせるというえらいお坊様が、どうでも見たくありません。それで、こんどは、口をとんがらせてそのふしあなにつけて、

「おほうさま。」

と、それはそれはかわいい声でよんでみました。やっぱり、お堂の中からは何んの返事もありませんでした。

「きつと、おほうさまはもう寝てしまわれたにちがいない。ちよいとだけくすぐっておこしてやろう。」

ボン吉は、なんだか楽しくなってきた、化けてかくしたしつぽを、すごきの下からニョキッと出すと、そのふしあなにさしこみました。

そのとたん、いつ、どこからおいになったのか、おっかさんたぬきから聞いたとおりのお坊様が、ボン吉の前にすつくと立っておられるのです。あんまりとつぜんなもんだから、ボン吉は

目を白黒させて、あわててしつぽをぬこうとしました。

ところが、どうしたことでしょう。すんなり入ったしつぽなのに、こんどはどうしてもぬけません。

「一、二の三。」

「一、二の三。」

もがけばもがくほど、よけいあながきゆうくつになるのです。そのうえ、ヒリヒリ、ヒリヒリしつぽが痛んで、つい、たぬきの本性をあらわしてしまいました。

お坊様は、べつにおこるでもなく、助けるでもなく、ほつぺたをふくらませて、じたばたしつぽをぬこうとするボン吉を見ていましたが、ふつと、

「このたぬきめ、えろう、りこうだと聞いとつたに、たいしたこともない。やっぱし、たぬきはたぬきじゃわい。」

と、心をゆるめました。

すると、

「おほうさま、もう決してお堂の中へしつぽなんか入れんで、かんにんして。」

と、それはかなしそうな声でボン吉が言うのです。お坊様は、心の中では、かわいらしい子たぬきめ、と思ったけれど、ちよいとこらしめてやろうと思って、

「ならん、ならん。こしょういぶしにでもしてくれよか。」
と言ってみると、

「うん、こしょういぶしならがまんする。そやけど、だいじなしっほだけには、油なんかぬらんどくれ。しっほに油ぬられると、もう化けれんようになるって、おっかさんが言ったもの。」
と、ボン吉が言いました。

「たわいないものよ。自分のほうからはんねなんかはきよって。」

お坊様は、そのままボン吉を逃がしてやるかと思っただけど、ちよいとだけ油をぬってみたくなくて、庚申堂のすぐわきの小屋から、つぼに入った種油を持ってくると、ボン吉のしっほにポタポタとたらしめました。

すると、ボン吉のしっほは、するりとあなからぬけてしまいました。

「おほうさま、はく、おほうさまに勝ったよう。」

ボン吉は、こりやしまったと、ポカンとしておるお坊様をふりかえりふりかえり山へ帰って行きました。

それからというもの、だれ言うもなく庚申堂の木戸のふしあなへしっほを入れたたぬきのことを、とんちたぬきとよぶようになったとき。

清水 みすず

大杉の観音さま

